読み比べ

羅城門の上層に登りて死人を見る盗人の語（『今昔物語集』）

今は昔、摂津の国のほとりより、盗みせむがために京に上りける男の、日のいまだ明かりければ、羅城門の下に立ち隠れて立てりけるに、朱雀の方に人しげくありきければ、人の静まるまでと思ひて、門の下に待ち立てりけるに、山城の方より人どものあまた来たる音のしければ、それに見えじと思ひて、門の上層にやはらかかつり登りたりけるに、見れば、火ほのかにともしたり。盗人、「あやし。」と思ひて、連子よりのぞきければ、若き女の、死にて臥したるあり。その枕上に火をともして、年いみじく老いたる嫗の白髪白きが、その死人の髪をかなぐり抜き取るなりけり。盗人これを見るに、心も得ねば、「これはもし鬼にやあらむ。」と思ひて恐ろしけれども、「もし死人にてもぞある。脅して試みむ。」と思ひて、やはら戸を開けて、刀を抜きて、「己は、己は。」と言ひて走り寄りければ、嫗、手惑ひをして、手を摺りて惑へば、盗人、「こは何ぞの嫗の、かくはしゐたるぞ。」と問ひければ、嫗、「己があるじにておはしましつる人の失せ給へるを、あつかふ人のなければ、かくて置き奉りたるなり。その御髪の丈に余りて長ければ、それを抜き取りて鬘にせむとて抜くなり。助け給へ。」と言ひければ、盗人、死人の着たる衣と嫗の着たる衣と抜き取りてある髪とを奪ひ取りて、下り走りて逃げて去りにけり。さてその上の層には死人の骸骨ぞ多かりける。死にたる人の、葬りなどえせぬをば、この門の上にぞ置きける。このことは、その盗人の人に語りけるを聞き継ぎて、かく語り伝へたるとや。（巻二十九第十八）